

# 日本女子大学所蔵『孝子聞書』についての一考察

芳 野 佳乃子

## 一 孝子説話について

孝子説話の起源は中国に端を発するものであり、近世期においては多くの孝子説話が世に出た。中国における孝子伝は早くに散逸してしまっているが、徳田進氏、黒田彰氏により、複数のテキストの存在が挙げられている。日本においても、孝子説話は古くからその存在が認められ、黒田氏により、『今昔物語集』や御伽草子『二十四孝』、その亜流として井原西鶴の『本朝二十不孝』がある。孝子説話とされるものの中には、先に挙げた『今昔物語集』のようにその名から内容の推測が容易ではなく、説話集の一部が孝子説話であることも考えれば、その全てを総攬することは難しい。しかし、近世期になってから、幕府の孝子顕彰に刺激され、『備前孝子伝』や『常陸孝子伝』がといった地名の後に「孝子伝」をつける作品群が見られるようになる。そして、近世期に孝子説話はそれまでにない盛況を見る。本稿で扱う日本女子大学所蔵『孝子聞書』（内題『大和八条村孝子聞書』）はそのひとつである。この作品は、宝暦三年の芝村騒動をもとにしたと考えられる山口庄右衛門の孝行譚である。諸本は現在次の九本が認められる。<sup>2)</sup>

- ・『大和国十市郡八条村孝子庄右衛門父子之紀』（写本、安永八年二月、堤定賢著）
- ・『大和国庄右衛門孝子聞書』（写本、写安永九年九月、『伊賀国孝子富松行状書』と合綴）
- ・『八条ものがたり』（刊本、安永八年四月、佐々木善行著、城下郡八尾新町書肆千葉清蔵刊）
- ・『八条ものかたり』（刊本、外題「八条孝子行状聞書」、天明元年六月、佐々木善行著、大坂南久太郎町心斎橋筋書林河内屋喜兵衛刊）
- ・『孝子庄右衛門行状聞書』（写本、文化三年正月、今崎弥次郎写）
- ・『孝子聞書』（写本、外題「孝信古今物語」、「安町小松屋」写）
- ・『孝子庄右衛門行状聞書』（黒川真道旧蔵本、『日本教育文庫』底本）
- ・『孝子庄右衛門行状』（写本、今西伊之吉、奈良県立図書館蔵、『東寺執行日記』と合綴）
- ・『孝子聞書』（写本、書写年不明、日本女子大学所蔵、内題「大和八条村孝子聞書」）

『孝子聞書』は、諸本により題や細部は異なるが、その大筋は共通している。凶作により困窮した村人の代表として近隣の村の代表と共に訴訟を起こした山口与十郎が罪に問われ、新嶋へ流刑に処される。与十郎の息子である庄右衛門は、父が不在の間、農業で生計を立てていたが、父が流刑地で眼病を患い失明したと知り、父の看病をしたいと願ひ出て単身新嶋に渡る。そして、許しを得たうえで父を連れて故郷に帰り、その孝順を表彰される。

『孝子聞書』は近世期に世に出た孝子伝の中で、どのような立ち位置を占めるものであったか。諸本の題を構成する語を見ると、「孝子」、「大和国」、「八条」、「庄右衛門」といった語のいずれかが含まれる。これらの題に含まれる語を、他の孝子伝と比較する。孝子伝はその題に「孝子」の語を持つことも多く、国文学研究資料館の日本古典籍総合目録データベースには、先述した『備前孝子伝』の他にも『会津孝子伝』、『伊賀孝子伝』、『鯨井村孝子伝』といった地名の含まれる題を持ち、成立年が明らかにされているものが二十七点挙げられる。同様の手法で、『西岡孝子儀兵衛行状聞書』や『孝子八郎左衛門行状書』等人名が題に含まれ、成立年が明らかにされているものは十二点見られた。また、『八条ものがたり』・『八条ものがたり』と類似する題を持つ作品として『かはしまものがたり』という作品が見え、『孝子聞書』が題の点では他の孝子伝と比較しても奇をてらったものではないと考えられる。

しかし、『孝子聞書』は同データベースにおいて伝記に分類されるものの中では、『本朝孝子伝』（諸本五十二点）について多く、『肥後孝子伝』（諸本九点）に並ぶ。『本朝孝子伝』の諸本の刊写年は貞享二・三年のものが多く、貞享二年から天明四年までと『孝子聞

書』よりはるかに長期に及ぶ。『肥後孝子伝』は刊行年がわかるものがすべて天明五年の刊行である。この点から、『孝子聞書』は孝子伝の中では比較的諸本が多く、刊写年が長期にわたることに特徴がある。また、『本朝孝子伝』、『肥後孝子伝』などは刊本が多く、写本は一点のみであるが、それに比して『孝子聞書』は写本が五点というようにその比率の高さが見られるのである。

勝又基氏は、この庄右衛門の孝子伝について「高山彦九郎日記」引用しながら次のように述べる。近世の孝子についての資料は、儒者や国学者による孝子伝が最も多く、それらは孝子の行動やその評価についてよく記しているとしたうえで、「孝子が表彰されてから五年も経った後にどのように生きていたか、ということについて記す資料は、ほとんどない」としている。

また、近世の孝子伝では、孝子表彰の動きもよく見られたとされる。勝又氏は椋梨一雪、藤井懶斎の集めた孝子説話の内容から「江戸時代前期の人々にとって、孝子が為政者から表彰されるという逸話は消して珍しいものではなく、耳慣れたものであった」と指摘している。『孝子聞書』においても庄右衛門は父を連れて帰郷した後、領主や役人からその孝順ぶりを称えられ、諸本によつては多くの賞与を与えられている。

『孝子聞書』は近世孝子伝の王道から大きく外れるような作品ではないが、近世孝子伝の中では比較的多くの諸本を写本で残し、長期にわたつて書写された作品として注目されると考えられる。

## 二 『孝子聞書』の諸本比較とその特徴

そこで、諸本を比較し、その書写順を特定し、その中でも日本女

子大学所蔵『孝子聞書』（以下、女子大本）の特徴を明らかにしたい。現在諸本は九本が知られているが、本稿では近世期享受の観点から、次の五本を用いる。

- ・ 日本女子大学所蔵『孝子聞書』（外題「大和八条村孝子聞書」）
- ・ 「大和国十市郡八条村孝子庄右衛門父子之紀」（安永八年二月、堤定賢著、天理図書館蔵、本文は『ビブリア』第一一二号による）
- ・ 「八条物かたり」（天明元年六月、佐々木善行織、大坂南久太郎町心斎橋筋河内屋喜兵衛刊、天理図書館蔵、本文は『ビブリア』第一一二号、題は内題による）
- ・ 「孝子庄右衛門行状聞書」（文化三年正月、今崎弥次郎写、天理図書館蔵、本文は『ビブリア』第一一二号による）
- ・ 「孝子庄右衛門行状聞書」（黒川真道旧蔵本、『日本教育文庫』底本）

諸本五本のうち、書写年が不明なのは、女子大本と黒河真道旧蔵『孝子庄右衛門行状聞書』（以下、黒河真道旧蔵本）である。この二本を除いた三冊を比較すると、時代が下るにつれて、増補がされる傾向が見られる。

例として、庄右衛門の家族構成について、『大和国十市郡八条村孝子庄右衛門父子之紀』では「弟妹我身ともに五人兄弟」と兄弟の人数のみが語られるが、『八条物かたり』では「妹二人第二人」、今崎弥次郎写本では弟や妹の名前までが語られる。また、今崎弥次郎写本には大和国十市郡八条村孝子庄右衛門父子之紀、『八条物かた

り』には登場しない庄右衛門の伯父や、新嶋で与十郎の世話をする福女という女性の存在が加えられている。

次に、この三本と女子大本、黒河真道旧蔵本の本文を比較する。谷山正道氏の論によれば、<sup>5)</sup>今崎弥次郎写本と黒川真道旧蔵本はほぼ同内容とされ、女子大本、今崎弥次郎写本、黒川真道旧蔵本の三本を対校すると、助詞や仮名に校異が見られるものの、記事の内容はほぼ同内容であった。しかし、この三本は、末尾において差異が認められた。女子大本の末尾は次のように記される（句読点は私に附した）。

則与十郎仏壇之御脇掛に致し朝夕拝礼被致候。猶また亥二月御門主様和州へ御下向被遊所々御從廻之節与十郎を被召寄出御刺刀被下置金百疋被下候。難有御事ためし稀なる事にぞありける。

今崎弥次郎写本の末尾でも、漢字や送り仮名の差異はあるもの、これと同じ一文が見られる。しかし、その直後に女子大本に見られない次の記述が加わる。

和州中道筋、郡山より南江三里半計、九品寺村より東江三町計入、八条村

（後筆）

明治十年 城南枇杷庄村

今崎弥次郎所持

久世郡第二区 聞書

枇杷庄村

#### 今崎弥次郎

黒河真道旧蔵本の末尾でも、今崎弥次郎写本同様に、漢字仮名の差異はあるものの、同様の一文が見られるが、その文以降、さらに今崎弥次郎写本にもない次の別の記述が見られる。

一帰国の後、即時に御領主へ召出され、御褒美をも頂戴す、其後、世の人此孝順をしたひて、其筆跡を乞に、孝弟の二字を書て是をあたふ、人は是を得て、永く其子孫に遺さんといふ人多かりき

和州中道筋、郡山より南江三里半計、九品寺村より東江三町計入、八条村

右聞伝へのま、書付侍れば、書写の相違なきにしもあらず、されど文にか、はらず、心をとて心の師となし給ふべし、

女子大本の末尾の一文に対し、今崎弥次郎写本では庄右衛門の故郷と資料についての記述が加わり、黒河真道旧蔵本では、庄右衛門の故郷と、庄右衛門が村に帰った後に人々に求められて、孝弟の二文字を書いたものを与えたという後日談と、庄右衛門を称える一文が増えている。

先に、『大和国十市郡八条村孝子庄右衛門父子之紀』、『八条物かたり』、今崎弥次郎写本の比較を通して、『孝子聞書』は時代を下るごとにその内容が増補されると述べた。この三本の傾向を女子大本、

黒河真道旧蔵本にもあてはめるのであれば、『大和国十市郡八条村孝子庄右衛門父子之紀』、『八条物かたり』、今崎弥次郎写本、女子大本、黒河真道旧蔵本の書写順は『大和国十市郡八条村孝子庄右衛門父子之紀』、『八条物かたり』、女子大本、今崎弥次郎写本、黒河真道旧蔵本であると考えられる。

この五本を比較したうえでの、女子大本の特徴はどのようにとらえるべきであろうか。諸本の中でも、物語の内容が最も簡素であるのが『大和国十市郡八条村孝子庄右衛門父子之紀』である。その後、時代を下るとともに増補が見られる傾向があることは述べた通りだが、女子大本、今崎弥次郎写本、黒河真道旧蔵本の三本は結末部を除けば、登場人物や出来事についての差異は見られない。福田安典氏は、『孝子聞書』諸本の題を比較し、女子大本について次のように述べられている。

仮に河内屋が求版の際に附した「孝子」と「聞書」が当時の読者の関心をくすぐる絶妙のキーワードだとすれば、女子大本はまさにそのエッセンスのみを集約した外題、内題を有することとなる。<sup>6)</sup>

女子大本以降の二本の諸本に、物語の展開についての差異は見られないことから、女子大本は『孝子聞書』が物語として完成した段階と考えることが出来る。加えて、福田氏の指摘されたことや、結末部において本の出自や庄右衛門の故郷についての記載がないことから、物語としての内容が完成した諸本三本の中でも、最もシンプルな原型だと考えることができる。

### 三 『統近世畸人伝』の影響

さて、この『孝子聞書』は他の近世期の孝子伝と違う大きな特徴がある。この山口庄右衛門が『統近世畸人伝』（天明八年頃草稿、寛政十年刊行）に採録されたのである。前述で考証した諸本の成立を踏まえて、芝村騒動から、今崎弥次郎写本までを時系列に西暦を入れて並べてみる。

宝暦三（一七五三）年 芝村騒動

安永八（一七七三）年 写『大和国十市郡八条村孝子庄右衛門

父子之紀』

天明元（一七八一）年 『八条物かたり』刊行 大坂南久太郎

町心斎橋筋河内屋喜兵衛

天明八（一七八八）年頃 『近世畸人伝』草稿完成

寛政二（一七九〇）年 『近世畸人伝』刊行

寛政十（一七九八）年 『統近世畸人伝』刊行

文化三（一八〇六）年 写『孝子庄右衛門行状聞書』今崎弥次

郎写

『八条物かたり』刊行から今崎弥次郎写本書写までの間に『統近世畸人伝』が世に出た。女子大本、黒河真道旧蔵本、今崎弥次郎写本において見られる増補が『統近世畸人伝』の記述と共通していることから、『孝子聞書』と『統近世畸人伝』との関係を考えなければならぬ。

『統近世畸人伝』は『近世畸人伝』の続編とされる。『近世畸人伝』、

『統近世畸人伝』ともに五卷五冊の伝記であり、著者は『近世畸人伝』が伴蒿蹊、『統近世畸人伝』が三熊花顔、伴蒿蹊増筆。三熊花顔が『統近世畸人伝』の完成より前に故人となったため、伴蒿蹊らによって増筆がなされた。畸人とは、一般的には性格や行動などが、ふつうの人とは異なっている人を意味するが、『近世畸人伝』、『統近世畸人伝』の定義はやや異なる。『近世畸人伝』の題言によれば畸人について次のように語られる（傍線部筆者）。

人のなすべき常の道ならずや、いかにと。予曰、然り。しかれどもおのれが録せるところの意、子がおもへる所に少しく異也。唯広く心得られよ。此中たとへば、売茶翁、大雅堂のたぐひは子がいはゆる一家の畸人也、仁義を任とせる諸老、忠孝の数子のごときは世の中の人にたくらべて行ふところを奇とせる也。（中略）曰、風狂放蕩かくの如しといへども、其中趣味あり、取べき所あるを挙る也。

この題言について、宗政五十緒氏は畸人について『莊子』に言う「人としては畸であるが、彼の人間としての在り方は天にかなっており、自然のあり方に合致している人」という意味と、「世人に比べて行なうところが奇である人で、これは道を尽くしたという点が奇である」と、二つの意味があると指摘している<sup>17</sup>。そこに加えて、傍線部の忠孝の人間が畸人の中に加えられたことに注目したい。『近世畸人伝』によってそれまで注目されなかった人物が畸人として世に広まった。『統近世畸人伝』でも、この畸人の定義は引き継がれ、庄右衛門は第一巻に収められている。庄右衛門の直前に収め

られる人物は義人・仏佐吉（永田佐吉）、直後には明和八年に領主から褒美、宅地の年貢免除を受けた兄弟睦者の若狭宗四郎・磯八兄弟、その後は明和七年に領主から褒美と終身の年貢免除を受けた孝行者・いとめが収められ、庄右衛門は明和年間の記事に挟まれる形になっている。山口庄右衛門は崎人として世に周知されることとなった。

では、『続近世崎人伝』では庄右衛門についてどのように語られるのであろうか。『続近世崎人伝』において新たに付け加えられた要素が次の六点である。

- 一、庄右衛門の叔父が加わる
- 二、福女が加わる
- 三、庄右衛門が立出る前に清右衛門が江戸に向かう
- 四、明和二年の大赦に与十郎が加わらなかった
- 五、与十郎が新嶋での商売をして生計を立てていた事

#### 四 庄右衛門の新嶋での功績

この六点が女子大本、今崎弥次郎写本、黒川真道旧蔵本にも見られる。この六点について、更に詳しく比較してみたい。

庄右衛門の伯父は『続近世崎人伝』、諸本三本ともに高野山の僧であり、与十郎の流刑後に庄右衛門を諭す人物である。『続近世崎人伝』では伯父は秘密裏に新嶋に渡ることを考える庄右衛門を、後に許しを得るときの差し障りになるからと留める。一方諸本三本での伯父は、庄右衛門の家督相続の補助を村人ともに行うほか、庄右衛門に婚姻を勧め、断る庄右衛門を説得する。もう一人、『続近世崎人伝』から登場する人物である福女は、失明した与十郎の世話

をしていた老女であり、新嶋の住人である。『続近世崎人伝』、諸本三本で福女は新嶋に渡ってきた庄右衛門に、妻子について尋ね、庄右衛門から与十郎に自分の妻子について話さないのは、与十郎に心苦しい思いをさせないためであるという答えを聞き、庄右衛門の孝順を見せる場面を作り出している。『続近世崎人伝』、諸本三本のどちらでも、福女は盲目の与十郎を献身的に世話し、父子の帰郷が叶ったことを喜ぶ、善良な人物として描かれているが、諸本三本では福女は与十郎・庄右衛門父子が許しを得て新嶋を去る場面にも登場し、父子から故郷・大和への同道を提案されるが、自分の両親の墓があるからと断り、新嶋に残る、という要素が新たに加わっている。

明和二年の大赦で、与十郎がその対象とならなかった点も『続近世崎人伝』、諸本三本に共通する。『続近世崎人伝』では「大赦あり」とされるが、諸本三本では、大赦によって許された者は十四名であったことまでが記される。与十郎が新嶋での商売をして生計を立てていた事、庄右衛門の新嶋での功績の評価についても、『続近世崎人伝』、諸本三本に共通する。しかし、『続近世崎人伝』では与十郎は「酒商売」によって生計を立てていたと対し、諸本三本では酒の商いに加えて立花もしており、その腕前から人望を集めていたという事柄が加わる。庄右衛門の新嶋での功績の評価も『続近世崎人伝』では「嶋人もかく庄右衛門が父に仕ふるを見て、父子孝慈の道をしりけるとかや」と庄右衛門の行動が新嶋の住人に対する啓蒙となったことが評価されるが、諸本三本では啓蒙に対する評価に加えて、「国よりいろいろの種を持下り、嶋人にもをしへ作り出し、中にも綿種たばこ種、今迄此嶋になかりしを持下り作りけ

る故、たばこ綿専ら嶋に出来候」と、新嶋に新たな作物をもたらしたことが評価されている。『続近世畸人伝』がこれら諸本三本の増補生成に大きく影響を与えたことは間違いないであろう。

『続近世畸人伝』からの影響下にこの諸本三本はあるが、諸本三本ではその内容が変更されている事柄もある。庄右衛門が新嶋に向かう前に弟・清右衛門が江戸出立する場面についてである。『続近世畸人伝』では大赦のことが知った庄右衛門が「此事を聞とひとしく弟の清右衛門といふものをあづまに下し」として、与十郎にも大赦が与えられるよう請願するために弟を江戸に遣わしている。それに対して諸本三本では清右衛門が江戸に向かうのは、与十郎に新嶋流刑の判決が下された直後であり、「父に暇乞の対面せん」ことが目的となっている。清右衛門が江戸に出立すること自体が『続近世畸人伝』から見られる内容のため、それ以前の諸本の影響とは考えにくい。諸本三本では、庄右衛門は家長である与十郎を失った家を支えるため、家から離れることが出来ず父の暇乞に向かうことは出来なかった。そのため、庄右衛門よりは自由に動ける清右衛門が江戸に向かう。また、諸本三本では大赦の際には庄右衛門自身が直接江戸に向き、父への恩赦を請願する。これにより、諸本三本では与十郎を失った庄右衛門らの困窮と父から家長の座を引き継いだ庄右衛門の奮闘ぶりがより詳細に描写されているといえる。

『続近世畸人伝』での増補に諸本三本で新たに増補された内容の特性について考察すると、父を安心させるため、つまり親の為に妻を娶れと説得する伯父や、自分の親の墓のために流刑地・新嶋に残る福女、立花において人望を集めた与十郎、庄右衛門の家族を支える姿や新嶋にもたらした影響等、登場人物の徳、特に孝順に関係

する事柄をより一層増す効果が考えられる。

## 五 まとめ

本稿では女子大本『孝子聞書』をとりあげ、孝子伝の中に於ける一般性と写本の多さという特性をまず指摘した。次に、諸本の比較により、女子大本は今崎や次郎写本、黒川真道旧蔵本と同系統に有りながらその原型であることを論じた。さらに、山口庄右衛門の話が、『続近世畸人伝』に採られていることから、女子大本、黒川真道旧蔵本、今崎弥次郎写本と比較した。結果、この三本が『続近世畸人伝』の影響を受けていることを論じた。

では、『続近世畸人伝』による影響が見られない『大和国十市郡八条村孝子庄右衛門父子之紀』、『八条物かたり』にはどのような性質が見られるかを論じることで、本稿のまとめとしたい。

『大和国十市郡八条村孝子庄右衛門父子之紀』、『八条物かたり』はそれぞれ、新嶋から帰還した後の庄右衛門・与十郎に著者が対面して話を聞いた記録とされる。対面については『大和国十市郡八条村孝子庄右衛門父子之紀』では「此一書は、亥二月十七日与十郎村へ行、与十郎盲人に逢、盲人口つからの物語をあらまし書記するもの也」、「八条物かたり」では「同じ月二十三日。かのかりに尋ね。父子にたい免し。はじめ終り委く聞ものから」と記されている。『大和国十市郡八条村孝子庄右衛門父子之紀』では庄右衛門と与十郎が八条村に帰ったのは安永七年十二月十四日であるから、帰村二か月後の取材である。『八条物かたり』も庄右衛門と与十郎の帰村した日は十二月十四日であり、「同じ月二十三日」に著者の佐々木善行が庄右衛門・与十郎父子に対面したとするので、刊行こそ『大和国

十市郡八条村孝子庄右衛門父子之紀』に遅れたものの、取材としては『八条物かたり』の方が先んじている。しかし、それらは事実の羅列だけであり、『続近世畸人伝』ならびにその影響を受けた諸本のような物語性はない。その物語性とはどのようなものなのであろうか。

孝子説話については、孝子の行いについて賛美する読み方の他に、政治的に都合のよい方向に民を誘導しようとする意図の存在が先の研究でも論じられている。『孝子聞書』についてもその例外ではない。森銃三氏は「昔の美しい性情を持った人の、美しい行ひをした物語」としたのに対し、木村博一氏は庄右衛門の孝行がお上の慈悲にすり替えられているとし、「与十郎の赦免を最大限利用して、その慈悲と善政を農民に印象づけ、騒動と弾圧の記憶を忘れさせよう」と意図したのではなかったか<sup>9)</sup>としている。庄右衛門の孝子説話は、早く世に出たもののほど、与十郎に対する幕府や当時の上層部の裁きの厳しさが目立つ。その罰の過剰な厳しさを緩和し、代わりに庄右衛門の孝順ぶりを際立たせるために必要なのが『続近世畸人伝』にもたらされた物語性であったのではなからうか。

しかし厳罰ぶりを孝順にすり替えただけからといって、『孝子聞書』が幕府批判や幕府による人民の統制を目的とされた作品であったか。『孝子聞書』の内容の変遷を追っていくと、時代を下るほど、庄右衛門に対し、領主や役人といった当時の為政者から与えられる褒賞の品は増えていき、金銭を与えられる描写も見られる。『大和国十市郡八条村孝子庄右衛門父子之紀』では「御料理被下候」となっているが、女子大本以降では複数の人物から金や青銅等を授けられている。

また、与十郎が新嶋に流罪となった理由は『大和国十市郡八条村孝子庄右衛門父子之紀』では「強訴徒党の科」、「八条物かたり」では「ひそかに箱訴」したこと<sup>10)</sup>で「党せしまさなご」とに問われたこととされる。女子大本以降では「御願の致方あしく」とされ、為政者による弾圧による文官は見られなくなっていく。さらに、幕府による慈悲を印象づける目的で世に出すのであれば、写本より刊本の方が向いているはずだが、上層部からの褒美が最も豪華な女子大本以降の諸本は写本のみにしか記されない。幕府による統制が目的であったならば、為政者にとって都合であろう与十郎への厳罰が緩和され、庄右衛門に気前よく褒賞を取らせた女子大本以降の諸本に写本より多く流通させやすい刊本がないことは不自然なことではなからうか。また、幕府批判を目的としていたのであれば、『続近世畸人伝』以降の諸本を写本として残す必要はなかったであろう。『孝子聞書』の諸本の変遷からは、幕府批判や人民統制といった政治に関連する点で、一貫した性質を見出すことは難しい。

では、『孝子聞書』が書写されるに至った要因は何か。それは、庄右衛門の父・与十郎を最優先にする姿勢が、当時の人々にとって評価すべきことであると同時に、程度が常軌を逸して、奇異なものであったことではなからうか。『近世畸人伝』、『続近世畸人伝』における畸人の解釈や、女子大本以降に見る、庄右衛門の筆を求める人々の行動から、庄右衛門の行動は通常では選択されにくいこと、評価の対象となることがうかがえる。大石慎三郎氏によれば、芝村騒動の起きた時期には、庄右衛門たちの身分である百姓は武士ほどではないが、分割相続よりも長子の家格相続の傾向が強まる傾向があったとされる<sup>10)</sup>。しかし、藤井勝氏によれば、近世農民の家長には



包括的な家長権が存在したわけではなく、家長自身も家の伝統や村の倫理によって拘束されていたとされている。そのような時代において、自分自身の妻子・弟妹を他所に奉公に出したり、預けたりと一時的とはいえ一家を離散させてまで父に孝順を尽くした庄右衛門の行動は、奇異なものであると同時に、人々の記憶に残る魅力たりえ、それゆえに『孝子聞書』は長期にわたり書写される作品たりえたのではなかろうか。

注(1) 黒田彰『孝子伝の研究』二〇〇一年九月 思文閣

(2) 谷山正道「芝村騒動と『八条ものがたり』」『天理図書館報ビブリア』一一二号・一九九九年一〇月

(3) 勝又基『孝子を尋ねる旅―江戸期社会を支えた人々』二〇一七年三月 三弥井書店

(4) 勝又基『親孝行の江戸文化』二〇一七年二月 笠間書院

(5) 谷山正道「芝村騒動と『八条ものがたり』」『天理図書館報ビブリア』一一二号・一九九九年一〇月

(6) 福田安典『日本女子大学本『大和八条村孝子聞書』について』『上方文芸研究』第二二二号・二〇一五年六月

(7) 宗政五十緒氏『近世崎人伝・続近世崎人伝 東洋文庫二〇二二解説 一九七二年 平凡社

(8) 森銃三『傳記文學 初雁』一九八九年 講談社学術文庫

(9) 木村博一『日本民族社会史研究』一九六九年 弘文堂

(10) 大石慎三郎『江戸時代における農民の家とその相続形態について』『家族制度の研究(上)』一九五六年七月 有斐閣

(11) 藤井勝「近世農民の家と家父長制」『家と家父長制』一九九二年七月 早稲田大学出版部

## 受贈雑誌(六)

滝川国文

國學院大學北海道短期大学部国文学会

滝川文芸

國學院大學北海道短期大学部フェリス女学院大学国文学会

玉藻

近松研究所紀要

園田学園女子大学近松研究所

中央大學國文

中央大學國文學會

帝京日本文化論集

帝京大学日本文化学会

帝京大学文學部紀要

帝京大学文学部日本文化学科

帝塚山派文学学会紀要

帝塚山派文学学会

東海学園言語・文学・文化

東海学園大学日本文化学会

東京四季

東京四季の会

東京女子大學日本文学

東京女子大學日本文学研究會

東京大学国文学論集

東京大学文学部国文学研究室

同志社國文学

同志社大学国文学会

同志社女子大学日本語日本文学

同志社女子大学日本語日本文学会

同朋文化

同朋大学人文学会

東北文学の世界

盛岡大学文学部日本文学科

都大論究

東京都立大学国語国文学会

名古屋大学国語国文学

名古屋大学国語国文学会

名古屋平安文学研究会会報

金城学院大学文学研究科

奈良学研究

帝塚山大学奈良学総合文化研究所